



TITLE:

ヒッタイト王国の政治と外交 一条
約と結婚による関係構築ー(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山本, 孟

CITATION:

山本, 孟. ヒッタイト王国の政治と外交 一条約と結婚による関係構築ー.
京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20115>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	山本 孟
論文題目	ヒッタイト王国の政治と外交 —条約と結婚による関係構築—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>紀元前2千年紀のオリエント世界は多極化した時代を迎えていた。複数の従属国を傘下に治めたエジプトとバビロニア、ミタンニ、ヒッタイト、アッシリアなどの大国の支配者たちは、自らを王の中の王として「大王」と名乗り、互いに対等な関係の下に外交活動を行っていた。この時代のオリエント世界の国際政治については、各国のイデオロギーが外交に与えた影響を論じたリヴェラーニの著書が基礎的研究となっている。しかし、リヴェラーニは、メソポタミアのバビロニア・ミタンニ・アッシリアと、アナトリアのヒッタイトを一括りに「アジア」とし、当時の国際社会を「アジア対エジプト」という巨視的な視点で捉えているため、各国の独自性については十分に考察されていない。古代オリエント世界の国際政治史研究を深めるためには、各国独自の政策上の理念が国家間の関係に与えた影響を議論する研究が必要であると考え</p> <p>る。本稿は、前17世紀半ばのアナトリアに成立したヒッタイトに焦点を当て、王国独自の政治理念が他国と関わる際にどのような影響を与えたかを明らかにするものである。</p> <p>紀元前2千年紀後半、ヒッタイト王は他の大王と条約を締結することで同盟関係を築き、王室間結婚を通じてその関係の強化をはかったとされる。また、ヒッタイトはこれと同様の政策を用いて周辺諸国に従属させ、持続的に支配していた。同盟国および従属国との関係を構築するために行われた政策が一致していることから、他の大国との友好関係を結ぶ場合にも、従属国を支配する場合にも共通する、「ヒッタイト的」理念があったと想定される。本論の目的は、他国の支配者と条約を締結することと、王室間で婚姻関係を結ぶという外交政策の背景に、どのような政策上の理念があったのかを明らかにすることである。</p> <p>ヒッタイト文書において、ヒッタイト王が諸外国の支配者と締結した「条約」と、国内の役人に指示を与えるために発行した「訓戒」は、外交文書と行政文書を分類するという便宜上の理由から、別個の文書ジャンルとして扱われることが多い。しかし、ヒッタイト語では「条約」も「訓戒文書」も同じ<i>išhiul-</i>という名詞で言い表されるため、ヒッタイトの人々はこれらを全く異なる種類の文書とは見なしていなかったと考えられる。したがって、この語が表している文書は、国内外を問わず一貫した政策理念の下に作成されていたのだと考えられる。そこで、本稿では第一に、<i>išhiul-</i>という言葉そのものの意味を根本から捉え直し、この語が象徴している政策上の理念を理解することを目指した。</p>			

第二に、ヒッタイト王室における結婚や親族に対する価値観が、いかに諸外国の王室との政略結婚の中に反映されていたのかについて考察した。紀元前2千年紀オリエント世界において、複数の属国を従える地域大国の支配者たちは王の中の王として「大王」を自称していた。また、当時の支配者たちは擬制的親族関係で結ばれていた。すなわち、大国の支配者である「大王」たちは、互いを「兄弟」と呼び合うことで対等であることを表し、大国に従属する国の支配者のことは「息子」と呼んで上下関係を表していたのである。加えて、各国の支配者たちは王室の間で結婚を繰り返し、他国の支配者が実際の親族となることもあった。当時の国際社会は、親族関係になぞらえた支配者間の関係を基礎に成り立っていたのである。そこで本稿では、このような国際社会の中であって、ヒッタイトの社会および王家の家族や親族に対する価値観が、他国王室との結婚という外交政策にどのような影響を与えたのかという点についても検討した。

本稿ではヒッタイト語の外交用語と親族語の用法を分析することで、条約締結と王室間結婚に表れる、ヒッタイト王国の外交政策に通底する理念を考察した。本稿の構成は以下の通りである。「条約」あるいは「訓戒文書」を意味する *išhiul-* という語は、ヒッタイト語の動詞 *išhai-/išhiya-* 「縛る」から派生した抽象名詞である。また、*išhai-/išhiya-* の類義語である、「結ぶ」ことを意味する動詞 *hamank-/hamenk-* は、文脈によっては「婚約させる」と訳されることがある。第1章では、本論の議論に先立ち、これら二つのヒッタイト語動詞の意味を比較し、それぞれが象徴するであろう、条約締結と王室間結婚の背景にある人間関係を理解することを目指した。続く第2章では、結婚に関連するいくつかのヒッタイト語表現を比較し、ヒッタイトの社会と王室における結婚のあり方が諸外国の王室との結婚に与えた影響について論じた。その上で第3章では、結婚を通して姻戚関係をもつようになった諸外国の支配者が、ヒッタイト王家の中でどのような身分と見なされていたかについて考察した。第4章では、第1章の結果を踏まえ、名詞 *išhiul-* の用例を分析することによって、「条約」と「訓戒文書」に通底するヒッタイトの政策理念を明らかにした。第4章までの議論を踏まえ、第5章では、ヒッタイトの外交のあり方を古代オリエント史の全体の中に位置づけた。

第1章では、*išhiul-* と呼ばれる文書と結婚を通じて築かれた、ヒッタイト王と他国の支配者との関係性をそれぞれ理解する前提として、動詞 *išhai-/išhiya-* 「縛る」と *hamank-/hamenk-* 「結ぶ」の意味を考察した。その結果、動詞 *išhai-/išhiya-* は、「地位の上の者が下の者に対して強制的に負担を課す」という意味があることがわかった。したがってこの動詞から派生する抽象名詞の *išhiul-* は「地位の上の者が下の者に対して強制的に負担を課すこと」を指している。このことから、王が役人に指示を与える「訓戒文書」だけでなく、君主の間で結ばれた「条約」にも締結者間に上下関係が想定されるのだということが示唆された。一方、動詞 *hamank-/hamenk-* が意味する「結ぶ」行為は *išhai-/išhiya-* が意味するような強制的に人を束縛するものではなく、離れた二つの対象

をつないでおくことであった。そのため、動詞 $\text{hamank-}/\text{hamenk-}$ が「婚約させる」と訳される場合には、それまで離れていた男女を結婚するまでの間つないでおくという抽象的な意味があることがわかった。

第2章では、「婚約させる」ことを意味する動詞 $\text{hamank-}/\text{hamenk-}$ と、その他の結婚にかんする表現(「結婚する」・「妻に取る」・「妻に与える」)の使われ方を比較した。その結果、ヒッタイト王は結婚を通じて諸外国の支配者に対し、自らが神々を代理する存在であろうとしていたことが明らかになった。考察の対象とした結婚に関する各ヒッタイト語表現は、結婚する男女を「結ぶ」主体が誰であるのかという点に違いがあった。動詞 $\text{hamank-}/\text{hamenk-}$ の用例からは、ヒッタイトの社会において男女を「婚約させる」主体が両親であったことがわかる。他方、この語は花嫁を花婿につなぐ神聖な道筋を引いたということも暗示しており、結婚の決まった男女を夫と妻の関係にさせるのは、実際には神々であると考えられていたことが示唆された。このことは、「結婚する」ことを意味する動詞 handai- の用例からも裏づけられる。「対にする」ことを基本の意味にもつ動詞 handai- は、神々がヒッタイト王と王妃を結婚させたという文脈で用いられることがある。すなわち、動詞 handai- が意味する結婚とは、神々が男女を夫と婦あるいは王と王妃という対の関係にすることであったと考えられるのである。一方、ヒッタイト王は、王女と諸外国の支配者の結婚に言及する際、常に「妻に与える」(DAM-anni pai-)という熟語表現を用いていた。これは、ヒッタイト王が男女を結婚させる神の役割を代理していることを示すための表現であったと考えられる。ヒッタイト王は、王女と諸外国の支配者を夫婦とし、その国の王と王妃という対の関係にしたのが神々の代理たる自分自身であることを強調しようとしていたことが明らかになった。

加えて、第3章ではヒッタイト王がこのようにして姻戚関係をもった他国の支配者を王家のヒエラルキーに組み込むことで、親族の枠組みの中でも自らが優位であることを明示したことが明らかにした。ヒッタイトでは王の息子だけでなく、王の養子や嫁婿も王位後継者となることがあったため、継承をめぐる王族男子は常に対立する可能性があった。そのため、ヒッタイト王は、大王たちが外交儀礼上「兄弟」と呼び合う慣例も、自国の兄弟関係と重ね合わせ、対等でありながら潜在的に敵対する可能性も内包する関係と捉えていたのだと考えられる。しかし、ヒッタイト王は従属国の支配者を擬制的に「息子」と呼ぶ慣例には積極的には従わなかった。たとえ外交儀礼であったとしても、王の「息子」であることは自国の王位継承を暗示するため、諸外国の支配者との関係を言い表すには不適切であったからである。ヒッタイト王は、姻戚関係をもった諸外国の支配者を、よりの確に実際関係を表す「姻族」という身分と呼ぶ傾向があった。ヒッタイト王家において、「姻族」は王の実子や兄弟に次ぐほどの立場でありながら、ヒッタイト王位を継承する資格はなく、王に絶対的な服従が求められる身分であった。諸外国の支配者との関係を尊重しながらも、自らに忠実であ

るべき存在に位置づけるために有用な身分であったのだと理解できる。したがって、ヒッタイト王が諸外国の王室との政略結婚で目指した最終目標は、相手国の支配者を自国王家の親族関係の中で劣位に見なすことであったと考えられる。

ヒッタイト王が、神々を代理するという役割を顕示することで、相手国に対して主従関係を示そうとしたことは、第4章で論じた「条約」を意味する語*išhiul*-の用例からも明らかである。第1章では、動詞*išhai/išhiya*-から派生する抽象名詞*išhiul*-が「地位の上の者が下の者に対して強制的に負担を課すこと」が原義であったとわかった。*išhiul*-という語が表す強制的な負担とは、第一義的には神から人間への命令であった。神から人間に下される命令は占いを通じて確認できるものと信じられており、王は占いの結果を元に、神々のために行うべき儀礼や祭の実際の手順を定める権限を持っていた。王がこの権限を用いてあらゆる命令を、神からの命令として文書化したものが、国内の役人への指示をまとめた「訓戒」と呼ばれる文書である。そのため、*išhiul*-という語を標題とする文書は、神に保証された王の権力の象徴であったのである。そして、ヒッタイト王が国内の役人へ指示を与えるのと同じように、従属する外国の支配者に発行した命令書が「条約」と呼ばれている文書である。このように、「訓戒文書」と「条約」は、ヒッタイト王が自らの絶対的な権力を誇示するための手段であったのだと考えられる。ただし、この語は当事者間の上下関係を含意するため、対等視された他の大王と結ばれる「条約」を言い表すためには適切ではなかった。このような場合、ヒッタイト王は自身と相手国の王が条約の義務を相互に課し合ったと説明することで対等な関係を示そうとした。また、エジプト王との条約締結にあたっては、発行者を王ではなく国家の最高神とすることで両者の対等性を示そうとしていた。

以上のように、ヒッタイト王は、神を代理する存在であることを根拠に、可能な限り他者に対して優位であることを示そうとしていたことが明らかになった。ヒッタイト王は、自らを人間の男女を夫婦の関係に導く神の役割と重ね合わせ、諸外国の支配者と王女を結婚させて王と正妃とし、結婚後は相手国の王を自国王家のヒエラルキーに取り込むことで、従属的な立場であることを示そうとした。同時に、ヒッタイト王は神から下された命令であるとして他国の支配者に負担を負わせる「条約」を発行し、自らの優位性を誇示したのである。ヒッタイト王は、自国の人民であれ他国の支配者であれ、あらゆる他者を義務に「縛り」、王家との縁を「結ぶ」ことを理想としていた。他者との間にこの二種類の関係性を築き、神々の代理人という立場を根拠に優位であろうとする王の態度は、国内外においてヒッタイト王国の行なった政策に一貫されていることが明らかになった。

本稿では最後に、結婚と条約締結という外交政策にあらわれるヒッタイト王の態度を、同時代のオリエント世界の大国と比較した。アマルナ文書からは、ヒッタイトと同様、ミタンニとアッシリアの大王は自国の王女と他国の王の結婚の主導権を握ろうとしていたことがわかった。特に、ミタンニ王の態度は、結婚を通じて最終的には相

手国の王を自国王室のヒエラルキーに組み込むことを目論んでいたと思われる点でヒッタイト王と共通している。このような態度は、ヒッタイトに先立ってミタンニに確認されることから、ヒッタイトの方がそれに倣った可能性がある。一方、「条約」とは、一方が他方に義務を「縛る」ための文書であるという考え方はアナトリアを起源とし、それがヒッタイト時代にオリエント世界全体に広がったのだと考えられる。ヒッタイト時代以前には、君主間で結ばれる「条約」とは、それぞれの君主が神々に誓いを立てるための「誓いの書板」であった。しかし、このような条約文書に対する認識は、ヒッタイトがオリエントの国際社会に影響を強めた、紀元前2千年紀後半に変化した。「条約」とは、君主間で一方が他方に義務を課すための「縛りの書板」とであると理解され、それがオリエント世界全体で一般化したのだと考えられる。「縛りの書板」としての条約は、その文書自体が主従関係を前提とするものであったために、列強が勢力均衡をはかっていた当時の国際社会に受け入れられたのだと推測できる。神を代理する名目で従属国に対して優位であることを示し、同時に自らと対等な関係にある相手国の支配者との条約においても相互に義務を課し合うという方法で妥協を図ることができたからである。

(論文審査の結果の要旨)

西暦紀元前2千年紀後半の西アジアは新王国時代の古代エジプト(第18, 19王朝)、中期バビロニア(カッシート朝)、中期アッシリア、ミタンニ、ヒッタイトの5大勢力が覇権を争う時代を迎えた。1887年エジプトのナイル河中流に位置するテッル・エル=アマルナ遺跡(アメンヘテプ4世の新都アケト・アテン)で発見された所謂アマルナ文書はこの時代の国際関係を具に示す外交書簡群であり、粘土板に楔形文字アッカド語で記録された内容の真正性が確認されて以来この時代の諸国家間の外交史を研究するための根本史料として重視されてきた。一方、アナトリア中部の古代遺跡Boğaz Köyでは1906年以来ドイツ隊による発掘が進められ、この場所がヒッタイト国家の都ハットゥーシャであったことが確認され、出土した楔形文字・粘土板文書の研究から最古のインド・ヨーロッパ系言語とされるヒッタイト語の解読が開始された。

紀元前2千年紀後半の西アジアの歴史を研究するためにはアマルナ文書とボアズキョイ出土文書の解読と内容分析が不可欠であるが、当時の粘土板文書を文献学、歴史学の立場からの的確に扱うためには、言語学的な研究が未だ進行中であるという理由もあって多くの障碍や困難がある。論者はシュメール語、アッカド語、ヒッタイト語の堅実な基礎知識と解読経験を基にこれらの文書を精密、丹念に解読し、歴史的な文脈でその内容を利用するために欧米の先行研究の成果を吸収しながらヒッタイト王家の内外で展開された政略結婚と王室間外交の実態、またその背後にあった王権観を明らかにするという目的で本論文を作成した。

研究の主題を提示し、先行研究の到達点を提示した序章に続いて、第1章ではボアズキョイ文書中に現れる「縛る」と「結ぶ」を意味する動詞2種*išḫai-/iṣḫiya-*と*ḫamank-/ḫamenk-*の意味する内容の相違がヒッタイト語テキストの翻字、翻訳を伴う文書中の用例分析から明らかにされていく。論者によれば、前者の動詞*išḫai-/iṣḫiya-*には「立場の強い者が弱い者に強制的に負担を課す」という意味を有することが明らかになり、この動詞から派生する*iṣḫiul-*の語は課す側と課される側の上下関係を前提として結び、発行される外国間の条約や国内向けの訓戒文書を意味し、一方後者の動詞*ḫamank-/ḫamenk-*には拘束力を連想させる意味はなく、男女間の婚約を意味する場合のように、離れた二つの対象を繋ぐことを意味するだけであるという。論者によるこうした精密な用例分析に基づく語意の説明は既存のヒッタイト語辞書の水準をはるかに凌駕したものであり、十分な説得力を持って明晰な論旨を支持している。

第2章では前章での語意分析の結果を承けてヒッタイト王室に関係する結婚の事例が「結び」という観点から考察される。動詞*ḫamank-/ḫamenk-*は婚約を表現するものであったが、他にも文書中に現れる結婚、「妻に取る」「妻に与える」等の表現の用例分析を通じて論者はこれらの表現がいずれも神権的な立場を背景にしたヒッタイト王が恩恵的な賜与として王室の従属国やエジプトなどの外国との政略結婚に関わっていたことを示すものであると結論している。

第3章ではヒッタイト王室に関わる兄弟や息子、姻族などを示す語についての用例

分析から王家の家族観が王位継承や王権との関連で取り上げられる。論者によれば、ヒッタイト王家には王位継承は直系男子によるという原則が存在し、この原則に抵触しない範囲での親族語を文書中に使用することによってミタンニやシリア各地の従属国のみならずエジプト、バビロニア等の外国王家との政略結婚が取り決められたとされる。

第4章では上意下達の義務を含意するという *išhiul*-の語の用例を論者が「縛りの書板」と呼ぶ文書群の中に求め、結論としてこの語は「神々の法」を意味しうる表現であり、神権的な権威を有する王が臣下に対して使用する場合には訓戒文書の意味となることが述べられる。以上の論証はヒッタイト語文書中に現れる *išhiul*-, *išhai-/išhiya*-, *ḥamank-/ḥamenk*-等の用例を網羅的に精査、検討して得られたものであり、ヒッタイトの国家、王権、家族観についての新知見に満ちた高度で精密な内容を含んでいる。

第5章はここまでの主としてヒッタイト語文書の分析、検討によって得られた結果を当時のエジプトを中心とする外交書簡群であるアマルナ文書に見えるエジプト、アッシリア、バビロニア、ミタンニ等の王室間政略結婚の事例と比較検討して前2千年紀後半におけるエジプト、西アジアの国際関係や外交について考察した意欲的な部分である。論者はこの時期の前後で誓約という文書中の表現を基調とした外交条約が、相互義務に縛られる状況を表現する *išhiul*-の語が象徴するヒッタイト型の対等条約へと変化していたのではないかという大胆な見通しを提示しているが、この部分の論証は本論文の中核部分をなす先の4章と比較してやや手薄であり、説得性に欠ける部分があることが惜まれる。ただし、この欠点も論者の旺盛な研究意欲に基づくさらなる研鑽により近い将来容易に克服されることが期待される。ボアズキョイ出土のヒッタイト語文書の本格的な解読が開始されてより百年余、西アジアとエジプト地域を除いて同時代の文字記録を保有する高度な文明社会が存在しなかった前2千年紀後半に隆盛を迎えていたヒッタイト国家の歴史研究に焦点を定め、今後の西アジアの古代史研究を牽引する可能性を持つ優れた実証研究であると評価したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成29年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。